

漱石『三四郎』見合い用絵画

Junko Higasa 2017.2.8

ヨーロッパ貴族になぞらえて、美禰子の肖像画は政略結婚の見合い用である。

野々宮宗八は、結婚を考えて、大久保に一軒家を借りた。そして妹のよし子にヴァイオリンを買ってあげるはずだった。しかしそのお金は美禰子の亡くなった長兄の友人である広田先生の引っ越し資金に貸して、しばらく戻りそうもない。その上、よし子が病気になり入院代出費。退院したが「学校の行き帰りに大久保は寂しい、兄は帰りが遅いし、下女と二人では心細い」ということで、また新たな家を探すことになった。そこで野々宮は下宿生活に戻り、妹は美禰子に預けて、彼の結婚準備は一步後退した。

そして運動会でのこと。野々宮が「画家の原口が、みんなを写生しているから、ポンチ画を描かれない様に気をつけて」と美禰子に注意する。ポンチ画とは主に風刺画の事を言うが、「下絵」という意味もある。すなわち「美禰子の見合い用絵画の下絵を描かれない様に」という注意は、「自分の生活状況が結婚に向けて整うまで待っていてほしい」という暗示にもとれる。

一方三四郎は、美禰子が好きなのに、彼女と初めて出会った時の構図で絵画が描かれることを好ましく思っていて、それが何を意味するのか気付かない。

結局、野々宮の結婚準備は整わず、鈍感な三四郎は、政略結婚の進行を黙って見ていることになる。